

旧甲州街道勝沼宿 と 萩原家住宅

萩原家は屋号を仲松屋と称する。住宅は、山梨県甲州市勝沼町勝沼の仲町に所在し、旧甲州街道勝沼宿の通りに面して立地する。

甲州街道は、日本橋を起点として八王子、甲府を経て、中山道の信州下諏訪に至るまでの区間で、勝沼宿は元和4年（1618）に新規宿駅として設置され、甲府盆地の東の玄関口にあたるため、江戸との接点として多くの物資が集散する中心地としてにぎわいをみせていた。



■寛文年間の勝沼宿絵図

勝沼宿の建物は東西に延びる甲州街道に面して建っている。かつての旅籠や商家の主屋は二階建、中二階建、平屋の3種類あり、防火用に土蔵造にしたものもあった。これらの建物に明治期以降、二階建あるいは三階建の土蔵が加わり、宿場と商家の両方の特徴をもつ勝沼宿独特の家並みが形成された。商家や旅籠は、大戸を備えた通り抜けの土間をもち、通りに面して店棚と帳場がある。大戸は跳ね上げ式あるいは引き上げ式の障子戸と板戸からなる。また、主屋の裏手には、土蔵や蔵座敷などの付属建物が配され、その間には坪庭が設けられている。

萩原家住宅は、旧甲州街道に北面して東側から東蔵、東店舗兼主屋、西店舗が建ち、西店舗の奥に西座敷、さらに奥に西蔵がある。また、東店舗兼主屋と西店舗の開口部に設けられた面格子が印象的な外観をつくっている。

現当主である萩原能成氏によると、能成氏の曾祖父である源助氏が元々2つに分かれていた土地建物を段階的に購入したという。最初に購入した東側の敷地を東屋敷、その後購入した西側の敷地を西屋敷と呼んでいた。

東店舗兼主屋及び西店舗、西座敷は、江戸末期から少なくとも源助氏が東屋敷を購入する明治14年には建築されていたと考えられる。西蔵は、墨書より明治13年の建築であることがわかっている。また、西蔵に和釘が使用されている一方で東蔵には洋釘が使用されていることから、東蔵は明治中期ころの建築であると考えられる。

なお萩原家は、源助氏が東屋敷を購入して移り住んだ際に、上松屋から分家して仲松屋と称した。



■萩原家住宅配置図